

LAST SNOW

札幌国際芸術祭

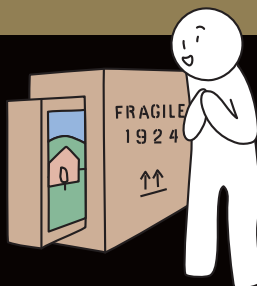
SIAF2024 SAPPORO INTERNATIONAL
ART FESTIVAL
Usa Mosir un Askay utar Sapporo otta Uekarpa

会場ガイドブック

北海道立近代美術館



English
Guide



1924-2024 FRAGILE

【こわれもの注意】

フラジャイルな100年間の箱を、開けてみる

中村聖司／北海道立近代美術館 学芸副館長

北海道立近代美術館（以下、当館）では、SIAF2024の一会場として、1924年から2024年現在まで100年間のアートに焦点を当てた企画を行う。

SIAF2024のテーマ“LAST SNOW”には、人新世と呼ばれる現代の自然環境の激変に対し、人間と社会がどのように向き合い、未来を開いていくかという問いかけが込められている。環境問題にはまた、政治的・経済的な強者と弱者の格差や、社会における差別構造との関係性が指摘されている。危機感と希望の両面をもつヤヌスのようなLAST SNOWを受け取って展覧会を組み立てるにあたり、企画者は当館のコレクションから出発することとした。

コレクションには1924年制作の作品、あるいは1924年の社会的事象に関連が深い作品がいくつかある。たとえば、北海道ゆかりの俣野第四郎と上野山清貢による絵画。それぞれ中国東北部（当時の満洲）と南（1922年には第一次世界大戦後に日本の委任統治領となったミクロネシアを管轄する「南洋庁」が成立）への国家的な進出が、背景にある。また、小柴外一によるガラス作品は旧日本海軍関係の記念品と考えられるが、モチーフとなった1万トン級重巡洋艦「妙高型」は、1924年に起工された。巡洋艦は高い遠洋航行能力が求められる軍艦であり、のみならず妙高型はそれ以前の日本の巡洋艦に比べ強化された武装に特徴があった。一方で同年、アメリカでは日本人含むアジア系移民の受け入れを禁止する、いわゆる「排日移民法」が成立。すでに18年前に渡米していた国吉康雄は、アメリカ国籍を取得できないままアメリカ美術界で生き、やがてモダニズムの画家として評価を高めていく。

このように、作品の背景にある社会的な「拡張」と「排除」に注目することから、展覧会構成のキーワードとして「ひろがる」を導き出した。そしてそこから先では、「ひろがる」という言葉の含意から展示内容を展開させた。北海道が国際関係における空間的な拡張と縮小の最先端となった、北洋漁業（平野禎邦のドキュメント写真）、そして人間の空間体験をひろげる環境芸術（行武治美のガラスによる光と音のインスタレーション）への注目である。

1924年はもちろん、コレクションだけでは語れない。フランスではシュルレアリスム運動の画期点となる複数のできごとがあった。理性のコントロールを遠ざけ、無意識からの表出に創造性をゆだねるシュルレアリスムのオートマティスム（自動記述）が、その後

展覧会のタイトルにもある“FRAGILE”は、「壊れやすい」「もろい」などの意味で、美術作品の輸送の現場で使われる言葉です。アート作品はモノとして傷つきやすいものですが、歴史の中でもさまざまな価値観にさらされてきました。“FRAGILE”について、展覧会の企画を担当された、北海道立近代美術館学芸副館長の中村聖司さんに解説していただきます。

の芸術に与えた影響はきわめて大きい。また、オランダでは「デ・ステイル」グループによるモダニズム運動の成果として、リートフェルト設計の《シュレーダー邸》が完成した。そこに示された簡潔明瞭な構成主義もまた、20世紀の抽象表現やデザイン、建築に脈々と受け継がれていく。一方、日本では1923年、関東大震災が発生。近代の大都市における未曾有の大災害の直後から、東京帝国大学学生たちによって社会的救援事業であるセツルメント運動が展開されていた。1924年には今和次郎の設計によるセツルメントハウスが東京本所区（現・墨田区）に建設される。それは運動の拠点であるとともに、災害を経験した人間が生み出した相互のつながりのシンボルである。

これらの事象を起点として、「ゆだねる」「シンプルに」「つながる」というキーワードを導き出し、そして上記と同じように言葉の含意に基づいて多分野のアートに注目した。キーワードはまた、社会がアートに提供した、あるいは、アートが社会に提供した価値でもある。

1924年に起こったいくつかの美術活動から出発した本展は、それらに示された、あるいは秘められた発見、思想、社会や他者との関係、感覚の覚醒、造形のロジック等の諸価値が、100年の間に継承・発掘・変容を通して多彩に展開されていく様子を概観するものである。そしてこうした諸価値を統合する展覧会タイトルとして設定したのが、“FRAGILE”（フラジャイル）であった。

FRAGILEとは、海外から美術作品が送られてくるとき、運搬者や受け取る美術館への注意喚起として梱包箱（クレート）に印字される英語であり、「こわれもの」「取扱注意」を意味する。もろい、きずつきやすい、だが注意すれば取り扱うことができる。アートは物理的にフラジャイルなばかりではなく、そこに込められた上述の諸価値もまたもちろん、こわれやすいものであろう。のみならず、歴史上あやうい方向へ転がされた価値もある。だからこそ取り扱い方が、大切なはずだ。それ自体がフラジャイルな諸価値のクレートである、アート。そのふたをぜひ、そっと開いてみてほしい。それが本展のメッセージであり、LAST SNOWへの応答としての本展のねらいである。

なお、この100年を伝えるには、変遷の振幅と相応の情報量の提示を必要とする。その実現を目指すにあたり、本展の形式においては、曲想の変転や音色の変化の大胆さと激しさ、そして全体のスケール感が際立つ、グスタフ・マーラーの音楽に範を求めた。彼の未完の第10交響曲が音となって初めて世に現れたのは、1924年のことであった。

1924



1) 俣野第四郎《ハルビン風景》1924年

俣野第四郎、満洲へ

日本政府、南満洲の租借権を延長。
ワシントン海軍軍縮条約(1922年)を受けて、妙高型巡洋艦が起工。
アメリカの天文学者エドウィン・ハッブル、観測に基づきアンドロメダ大星雲が銀河系の外にあることを証明。
アメリカで排日移民法制定。



2) 上野山清貢《とかけを弄び夢見る島の乙女》1924年

上野山清貢、南へ

アメリカで排日移民法成立



3) 国吉康雄《横たわる裸婦》1929年

妙高型巡洋艦、起工



4) 小柴外一《軍艦置物》1939年

ひろがる

“FRAGILE”展を年表で見る。

会場では、1924年から2024年現在までの100年間のアートを、「ひろがる・ゆだねる・シンプルに・つながる」の4つのコーナーに分け、順に巡るよう展示しています。この年表ではその中から、各作家1点ずつの図版*と、作品に関連性の強いできごとを掲載しました。各コーナーの作品を縦軸あるいは横軸で比較することで、100年前から今日までの時の流れとともに、様々なアートが同時代現象として生起・展開する様子をご覧ください。

* 紙幅の都合上、北海道立北方民族博物館コレクション「イヌイトの壁掛け」からは1作家とした。



小川ディレクターより

ChatGPTに聞いてみました「1920年代に誕生したテクノロジーとは？」

テレビ: テレビの概念は1920年代に導入された。1926年に世界で初めてブラウン管での映像の表示に成功。ロンドンのBBCが1929年に定期放送を開始。

映画における音響(トーキー映画): サイレント映画から「トーキー映画」への移行は1920年代後半に起こった。

糖尿病のインスリン療法: 1922年、糖尿病の治療にインスリンが初めて使用された。フレデリック・バンティング、チャールズ・ベストらによるこの画期的な治療法は、糖尿病の治療に革命をもたらし、糖尿病患者の生活の質を著しく向上させた。

ジェットエンジンのコンセプト: ジェットエンジンが実用化されたのはその後だが、そのコンセプトが最初に提唱されたのは1920年代である。

民間ラジオ放送の採用: 1920年代には商業ラジオ放送が急速に拡大した。ラジオ局は定期的な放送を開始し、このメディアはニュースや娯楽の重要な情報源となった。

冷凍食品技術: クラレンス・バードアイが1920年代に食品保存のための急速冷凍法を開発した。この技術革新は、現代の冷凍食品産業の基礎を築いた。

ディレクターイラスト: 坂本奈緒



シュルレアリスム、さかんに

5) ルイ・アラゴン、アンドレ・ブルトンほか(編)
『シュルレアリスム革命 第1号』(表紙)
1924年(参考図版)
© Bibliothèque nationale de France

『シュルレアリスム宣言』と『シュルレアリスム革命』誌刊行。
シュルレアリスム研究所開設。

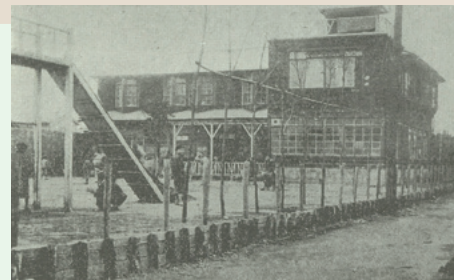
ゆだねる



リートフェルト設計 《シュレーダー邸》完成

6) ヘリット・リートフェルト《シュレーダー邸》1924年(参考図版)
© Rietveld Schröderhuis (collectie Centraal Museum, Utrecht).
Fotografie Stijn Poelstra.

シンプルに



今和次郎設計 《帝大セツルメントハウス》完成

7) 今和次郎《東京帝国大学セツルメントハウス》1924年(1926年頃撮影)
図版引用元: 東京帝国大学セツルメント編『東京帝国大学セツルメント十二年史』1937年

つながる

1930

1940

1950

1960

ひろがる

1925年
日ソ国交樹立。
以後、北洋漁業が盛行。

1952年
太平洋戦争で中断
していた北洋漁業
が再開。



8) 栗谷川健一
《北洋博》1953年



9) 砂田友治《北海の男たち》1965年



10) 本田明二《北洋の男》1969年

1966年
アラン・カプロー、『アッサンブラージュ、
エンバイロメント、ハプニングス』を
出版。

銀座松屋にて、「空間から環境へ」展
が開催。

1926年

スタンレイ・ウィリアム・ヘイター、パリ
に「アトリエ17」を設立。シュルレアリ
スムの画家たちが訪問。

1940年

戦争の煽りを受けて、「アトリエ17」が
ニューヨークに移転。ジャクソン・ポロ
ックらが訪れ、以後、アメリカの抽象表
現主義絵画に影響を与える。

1956年

日本橋高島屋で「世界・今日の
美術展」が開催。アンフォルメ
ル(不定形)旋風が巻き起こる。

ゆだねる



11) スタンレイ・ウィリアム・ヘイター
《サーカス》1933年
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 G3400



12) ジュアン・ミロ
《『デリエール・ミロワール Nos.125-126』より》1961年
© Successió Miró / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 G3400



13) 難波田龍起《秋の詩》1961年

1933年

ナチスによりパウハウス閉校。ジョー
ゼフ・アルバースが渡米し、ブラックマ
ウンテン・カレッジにて教鞭を執る。

1957年

第11回ミラノ・トリエンナーレ
にてチェコスロヴァキアの現
代ガラス彫刻が初出品。



14) ヴィクトル・ヴァザルリ
《C-LAPIDAIRE-C》1962年
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023 G3400

1962年

スタニスラフ・リベンスキー、プラ
ハ美術工芸大学のガラス学部教
授に就任。

1964年

アメリカ、ロサンゼルス・カウンティ美術館にて、
クレメント・グリーンバーグ企画の「ポスト・ペイ
ンタリー・アブストラクション(絵画的抽象以後の
抽象)」展が開催。カラー・フィールド・ペインティ
ング、ハードエッジの画家たちが参加。

1965年

ニューヨーク近代美術館で「応答
する眼」展が開催。以後、オブ
・アートが普及。

シンプルに

1925年

武井武雄が東京にて「童画」と題する
個展を開催。

1945年

太平洋戦争終結。画家・宮田茂雄が「美術家の節操」
を朝日新聞に寄稿し、戦争画論争が起こる。

1949年

カナダ政府、イヌイット・アートの奨励活動
を推進。

1962年

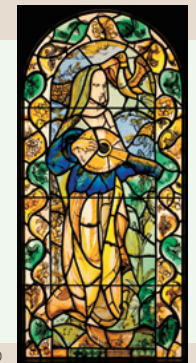
スイス、ローザンヌ州立美術館にて第1回国際タペストリー・
ビエンナーレが開催。「ファイバーワーク」の誕生。

1964年

国際自然保護連合、『IUCN 絶滅危惧種レッドリスト』を創設。
ロンドンにて、動物園と自然保護に関する
初の国際シンポジウムが開催。

1967年

旭川市旭山動物園開園。



15) レオナルド・フジタ(藤田嗣治)
《平和の聖母礼拝堂ステンドグラス:聖チェチリア》
1966年(2008年再制作)

つながる

1970



16) 平野禎邦
《タラ延繩船、北千島》
1973年

1980

1976年

ソ連が200海里漁業水域を設定。
以後、北洋漁業は衰退。

1990

1989年

ソ連が崩壊し、冷戦終結。
アメリカを中心とするグローバル経済へ。

2000

2001年

タリバン政権により
パームヤンの石仏が破壊。



17) 阿部典英
《ネエ ダンナサン あるいは 否-非-悲》
2002~2003年

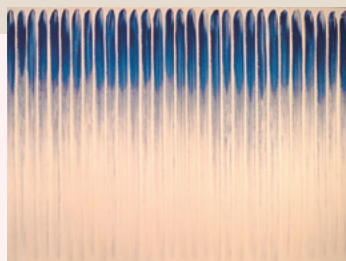
ひろがる

1971年

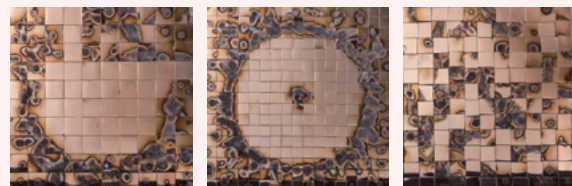
李禹煥、評論集『出会いを求めて 新しい芸術のはじまりに』
出版。もの派の理論を展開。

1972年

第8回東京国際版画ビエンナーレにて高松次郎のゼロロック
ス・コピーによる《THE STORY》が国際大賞を受賞。「版
画概念の拡大」が話題となる。



18) 李禹煥《線より #80057》1980年
© Lee Ufan, 2024



19) 一原有徳《S.M.円(A)》1986年

1997年

コンピューター「ディープブルー」が
チェスの世界王者に勝利。

2006年

ディープラーニングの登場。

ゆだねる

20) ブリジット・ライリー《ファイアバード》1971年



21) ジョーゼフ・アルバース
《フォーミュレーション:アーティキュレーションII-27》1972年
© The Josef and Anni Albers Foundation / JASPAR, Tokyo, 2023 G3400



22) リチャード・アヌスキウィツ
《ライト・カドミウム・レッド・スクウェア》
1979年
© Richard Anuszkiewicz / VAGA at ARS,
NY / JASPAR, Tokyo 2023 G3400

23) スタニスラフ・リベンスキー、
ヤロスラヴァ・プリフトヴァ《柱》1989年



24) 花田和治《海 I》1990年



25) 杉山留美子
《WORK 9704-1》《WORK 9704-2》《WORK 9704-3》1997年

シンプルに

1970年

カナダ、ベイカーレイク(カマニトゥアク)でテ
キスタイル制作が奨励され、「イヌイットの
壁掛け」が誕生。

1972年

スウェーデン、ストックホルムにて国連人
間環境会議開催。国際社会が初めて環境
問題を取り上げる。



26) H・マノンク《黒いダッフルの上の顔と化身》
1979年

1977年

北海道立近代美術館開館。

1980年

旭山動物園にて、オオコノ
ハズクの人工繁殖に成功。
繁殖賞受賞。



27) 国松登《星月夜》1991年

1991年
湾岸戦争勃発。



28) ダナ・ザーメチニーコヴァ
《私の家族》1997年

1992年

ブラジル、リオデジャネイロで「地球サミッ
ト」開催。アジェンダ21採択。

2000年

パウル・クルツツェンとユージン・ストーマー、
「人新世」の地質年代区分を提唱。

2007年

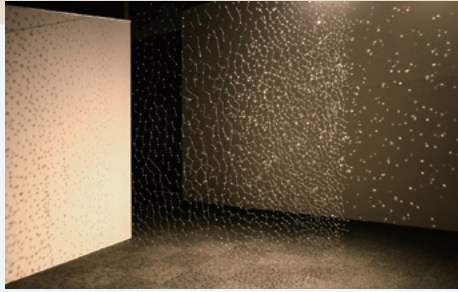
旭山動物園、この年の入園者数が300万
人を超える。



29) 中村木美
《エジプトの月》2009年

つながる

2024



30) 行武治美
《UNTITLED》2018年(参考図版)
※本展には新作を展示



31) 宮田彩加
《MRI SM20110908》2016年~
Photo by TAKASHIMA Kiyotoshi



32) 石井亨
《東京景_07442892_センター街》2022年
Courtesy of Sokyō Gallery



33) あべ弘士《アリュージョン・マジック》2022年(参考図版)
※本展には新作を展示

作家・作品解説

年表で紹介してきた作品は、どのような時代背景の中で生まれたのでしょうか。ここでは作家の生年や出身地などとともに解説していきます。

※所蔵の記載のないものは、すべて北海道立近代美術館蔵(参考図版をのぞく)。
※30、33は新作のデータを記載した。

1) 俣野第四郎 (1902–1927) 《ハルビン風景》 ひろがる

1924年 油彩・紙 33.8×48.0cm

東アジアの一大国際都市として繁栄した満洲の都市ハルビン(ハルビン)は、日露戦争後、日本の租借地となったことで数多くの日本人が訪れた。函館出身の俣野も1924年、失恋を契機にこの地を旅行し、本作を描いた。

2) 上野山清貢 (1889–1960) 《とかげを弄び夢見る島の乙女》 ひろがる

1924年 油彩・キャンバス 79.5×115.3cm

北海道札幌郡江別村(現・江別市)出身の上野山は1924年、九州と硫黄島(鹿児島県)に旅行し、本作を制作。翌年には日本の委任統治領であったマリアナ群島にも赴いている。ポール・ゴーギャンの影響を受けながら、この時期に日本人が夢想した「未開の南洋」像を描く。

3) 国吉康雄 (1889–1953) 《横たわる裸婦》 ひろがる

1929年 油彩・キャンバス 101.6×203.2cm

日露戦争後、日本人移民への排斥運動が激化したことを受けて、1924年にアメリカでは「排日移民法」が制定された。1906年に17歳で渡米した国吉も市民権を得ることはできなかったが、生涯「アメリカの画家」として活動し、同地で高く評価された。

4) 小柴外一 (1901–1973) 《軍艦置物》 ひろがる

1939年 キャスト・ガラス 幅30.3×奥行3.5×高さ5.3cm

小柴が入社した岩城硝子製造所は軍需指定工場として販路を広げていた。本作は旧海軍省に納入された記念品(文鎮)として制作されたのだろう。モチーフの「妙高型」軍艦は、第一次世界大戦後のワシントン海軍軍縮条約で主力艦の建造が制限されたことを受け、1924年に起工された巡洋艦。

5) ルイ・アラゴン、アンドレ・ブルトンほか(編)『シュルレアリスム革命 第1号』(表紙) ゆだねる

1924年 パリ(参考図版)

6) ヘリット・リートフェルト (1888–1963) 《シュレーダー邸》(南東側ファサード) シンプルに

1924年 ユトレヒト(参考図版)

7) 今和次郎 (1888–1973) 《東京帝国大学セツルメントハウス》(南面) つながる

1924年(1926年頃撮影)

関東大震災の翌1924年、今和次郎は被災者生活支援活動を行っていた東京帝国大学セツルメントの拠点としてハウスを設計。生活芸術がもたらす心理効果という観点から都市と生活の復興に携わった。

- 8) 栗谷川健一 (1911-1999) 《北洋博》 ひろがる
1953年 オフセット・紙 108.6×73.0cm
北海道岩見沢町(現・岩見沢市)出身。日本の北方において国際的に行われる漁業は、大正期から「北洋漁業」と呼ばれた。本作は北洋漁業が、太平洋戦争による中断をはさんで1952年に再開されたことを記念し、函館で開催された博覧会のポスター。
- 9) 砂田友治 (1916-1999) 《北海の男たち》 ひろがる
1965年 油彩・キャンバス 181.8×230.2cm
北海道苫小牧に生まれた砂田は、1960年代から北洋漁業の漁夫たちをモチーフにした作品を手掛けた。北の海での厳しい環境の中で働く無骨な男たちを、ごつごつと盛り上げた赤い絵具で大胆かつ力強く表現している。
- 10) 本田明二 (1919-1989) 《北洋の男》 ひろがる
1969年 木 幅36.0×奥行29.0×高さ53.5cm
北海道月形村(現・月形町)に生まれ、北海道彫刻界で長く指導的役割を果たした本田の作品には、北の風土に育まれた野生味とともに素朴な優しさが込められている。本作は、はちまきを締め、顔の下半分を布で覆った北海道の漁夫をモチーフにしている。
- 11) スタンレイ・ウィリアム・ヘイター (1901-1988) 《サーカス》 ゆだねる
1933年 エングレーヴィング・紙 21.9×30.5cm
ロンドン出身の版画家ウィリアム・ヘイターは、オートマティックな線描により新たな版画表現を切り開いた。彼が1926年にパリで設立した版画工房「アトリエ17」には、同地のシュルレアリストたちが集ったほか、1940年のニューヨーク転居後はアメリカ抽象表現主義の主要作家に多大な影響を与えた。
- 12) ジュアン・ミロ (1893-1983) 《『デリエール・ル・ミロワール Nos.125-126』より》 ゆだねる
1961年 リトグラフ・紙 36.5×81.0cm
1924年、詩人アンドレ・ブルトンが「シュルレアリスム宣言」を発表。以後シュルレアリスムは国際的な広がりを見せる。この運動に参加したバルセロナ出身の画家ミロは、無意識の世界を探究する「オートマティスム(自動記述)の画家」として評価された。
- 13) 難波田龍起 (1905-1997) 《秋の詩》 ゆだねる
1961年 油彩、エナメル・キャンバス 112.1×193.9cm
旭川出身の難波田は、1960年代からアンフォルメル(不定形)や抽象表現主義の影響を受けて、ドリッピング(絵の具を滴らせる)の技法を取り入れる。オートマティックなエナメルの黒い線と線の交錯によって、作家が言うところの「内的生命の律動感」を描出している。
- 14) ヴィクトル・ヴァザルリ (1908-1997) 《C-LAPIDAIRE-C》 シンプルに
1962年 コラーージュ・紙 16.5×16.5cm
ハンガリー出身のヴァザルリは、ブダペストでバウハウス流のデザイン教育を受けた後、パリへ移住し幾何学的な抽象絵画を制作。本作は、厚紙で制作した複数の色の円と四角形を組み合わせ、錯視の効果による凹凸の変化を狙ったもの。
- 15) レオナルド・フジタ (藤田嗣治) (1886-1968)
《平和の聖母礼拝堂ステンドグラス:聖チェチリア》 つながる
1966年(2008年再制作) ガラス、鉛 140.2×65.0cm
東京府牛込区(現・新宿区)出身。戦争画を手がけたことで戦後に批判を受けた藤田は、1955年にフランスへ戻り、日本国籍を抹消。ランス大聖堂にてカトリックの洗礼を受けて「レオナルド・フジタ」と改名した。晩年には、ヨーロッパと日本それぞれにおける戦争体験から「平和の聖母礼拝堂」を建立した。本作は藤田と共同でステンドグラスの制作を行っていたシモン・マルク工房によって復元されたもの。
- 16) 平野禎邦 (1944-1992) 《タラ延縄船、北千島》 ひろがる
1973年 ゼラチン・シルバー・プリント 23.2×16.3cm 個人蔵
朝鮮咸鏡北道に生まれた平野は、1968年10月末に北海道の根室に移住。北洋漁船で働きながら、厳しい気候、荒れる海、ソ連による拿捕の脅威にさらされる過酷な漁の様子を、写真に撮り続けた。
- 17) 阿部典英 (1939-) 《ネエ ダンナサン あるいは 否・非・悲》 ひろがる
2002~2003年 アクリル絵具・木、ステンレススチール 幅95.2×奥行49.0×高さ212.6cm
札幌出身。本作は、2001年のタリバン政権によるパームヤン石仏破壊事件をきっかけに制作。張り巡らされた鏡面に抽象化された人体像が映しだされることで、繰り返される惨劇と巻き込まれる人々の姿が重ねて表現されている。
- 18) 李禹煥 (1936-) 《線より #80057》 ゆだねる
1980年 岩絵具・キャンバス 193.1×259.1cm
韓国慶尚南道出身。「もの派」を代表する作家として、日本の現代美術をけん引し、現在まで国際的な活動を続けている。幼少期に習った書道から着想を得た〈線より〉シリーズは、筆に含ませた絵具がかすれるまで線をひくことで、行為の痕跡、時間の経過を示している。
- 19) 一原有徳 (1910-2010) 《S.M.円(A)》 ゆだねる
1986年 蛍光塗料、アセチレンバーナー焼付け・ステンレス板 50.0×50.0cm 他
徳島出身。幼少期に小樽へ移住し、以後同地を拠点に、モノタイプや金属凹版による偶発的な版画表現を追求した。本作は作家が1960年代から展開した熱版による一連の作品のうち、炎それ自体を版として直接ステンレスの板に焼き付け、変形させたもの。
- 20) ブリジット・ライリー (1931-) 《ファイアバード》 シンプルに
1971年 シルクスクリーン・紙 66.4×94.6cm
ロンドン出身。新印象派の画家ジョルジュ・スーラに影響を受けて視覚効果を追求め、オプ・アートの代表作家となる。初めはモノクロームによる発光と運動のイリュージョン的效果を与える絵画作品を制作したが、1967年以降、多色を用いて鑑賞者の目をより強く刺激する画面へと変化した。
- 21) ジョーゼフ・アルバース (1888-1976) 《フォーミュレーション:アーティキュレーションII-27》 シンプルに
1972年 シルクスクリーン・紙 各17.5×17.5cm
ドイツ生まれのアメリカ画家。バウハウスに学び、また、デ・ステイルの影響を受ける。1933年に渡米し、ブラックマウンテン・カレッジで後進を指導。平面と奥行、知覚の多様性を研究し、1950年代以降、〈正方形礼賛〉シリーズを制作した。

22) リチャード・アヌスキウィッツ(1930-2020)《ライト・カドミウム・レッド・スクウェア》 シンプルに

1979年 アクリル絵具・キャンバス 122.5×122.5cm

ペンシルヴァニア州エリー出身。イェール大学でジョーゼフ・アルバースに学び、以後オブ・アートを手がける。師の厳格な幾何学的抽象造形に、鮮明かつ強烈な色面のコントラストや運動感を加えた作品を制作した。

23) スタニスラフ・リベンスキー(1921-2002)、ヤロスラヴァ・ブリフトヴァ(1924-2020)《柱》 シンプルに

1989年 キャスト、研磨・ガラス 幅33.3×奥行20.0×高さ165.4cm

両者ともチェコスロヴァキア出身。1954年以来、リベンスキーはブリフトヴァと共同で「光」と「空間」を表現に取り入れた作品を制作。鑄造技法を駆使したダイナミックな造形は、世界の現代ガラス作家たちに大きな刺激を与えた。

24) 花田和治(1946-2017)《海 I》 シンプルに

1990年 油彩・キャンバス 77.0×385.0cm

札幌出身。初めは厳格な矩形の色面を水平垂直に組み合わせた「ハード・エッジ」の抽象絵画を描いたが、40歳代前後になると、より自由な形態と構成により、自然や風景の広がりや大きさの表現へと向かった。

25) 杉山留美子(1942-2013)《WORK 9704-1》《WORK 9704-2》《WORK 9704-3》 シンプルに

1997年 アクリル絵具・綿キャンバス 各193.9×112.1cm

札幌出身。TODAYなど北海道の前衛的な美術運動に参加し、曼荼羅に着想を得た東洋的な抽象絵画を制作して注目を浴びる。1990年代以降、うすめた絵具をにじませ広げることで、キャンバスの内側から光が発せられているような絵画世界を創りあげた。

26) H・マノンク(生没年不詳)《黒いダッフルの上の顔と化身》 つながる

1979年 ダッフル地・刺繍、アププリケ 49.2×76.0cm 北海道立北方民族博物館蔵

カナダ極北地方、ベイカーレイク(カマニトゥック)の先住民民族イヌイットの女性たちは、1970年代頃から、防寒着に用いたダッフル地の端切れを使って壁掛けを制作。この時すでに失われつつあった民族の伝統的な日常生活と精神世界を表した。

27) 国松登(1907-1994)《星月夜》 つながる

1991年 油彩・キャンバス 162.0×162.0cm

函館出身。1940年前後から、装飾的な画面構成とゆたかな詩情を特色とする作風により評価を高めた。戦後、月夜の流氷の海に人や動物がたたずむ〈氷人〉シリーズを展開。晩年の本作では、氷原をさまよう象の親子に、中東の難民のイメージを重ね合わせている。

28) ダナ・ザーメチニーコヴァ(1945-)《私の家族》 つながる

1997年 着色、ミクスト・メディア・板ガラス 幅120.0×奥行56.1×高さ210.0cm

チェコスロヴァキア出身。作家自身の家族をテーマとした本作は、4枚の描画した大きな板ガラスや木製の椅子の実物などを使用し、等身大の臨場感の中に豊かな幻想性を織り込んでいる。

29) 中村木美(1934-)《エジプトの月》 つながる

2009年 マクラメ技法・木綿撚り糸、金属棒 幅43.5×奥行49.0×高さ183.5cm

西洋の伝統的なタペストリーに始まる「ファイバーワーク」は、1970年代に立体化し、造形芸術として発展する。札幌出身の作家、中村木美による本作は細い一本の糸と糸を撚り、絡め、結び合わせる「マクラメ技法」を応用して、巨大かつ力強い、堂々とした造形物へと変化させている。

30) 行武治美(1966-)《凍景》 ひろがる

2024年 ガラス・ワイヤー 幅480.0×奥行840.0×高さ400.0cm 制作協力:森崎おかる 作家蔵

東京に生まれ、国際的に活躍するガラス作家。連結・配置された膨大な数のガラスに光が透過、反射したり、ガラス同士の接触で発せられる透明感のある音によって凍てつく光の林のような空間を作り出す。本会場の展示空間を踏まえて制作されたインスタレーション。

31) 宮田彩加(1985-)《MRI SM20110908》 ゆだねる

2016年~ ミシン刺繍・ミシン糸 各約110.0×90.0cm 作家蔵

京都出身。手縫いの刺繍作品に始まり、近年では家庭用コンピューターミシンの刺繍データをプログラミングし、そこに意図的にバグを生じさせることで予定調和な表現からの逸脱をねらう。自身のMRI画像などをモチーフに、生物の形態や進化の在り方と、ミシンを用いた独自手法が呼応し合う作品を制作。

32) 石井亨(1981-)《東京景_07442892_センター街》 つながる

2022年 糸目友禅染、酸性染料、顔料、フォイル・絹 縦82.3×横82.3×厚さ4.0cm 作家蔵

埼玉出身。アメリカ戦後絵画に始まるステイニング(にじみ)と日本の伝統的な糸目友禅を技法とする絵画表現を展開。〈東京景〉は、現代の浮世絵という発想に基づき、フィルムカメラによる撮影、デジタル技術による写真の加工、バグの組み込みというプロセスを通して、今日の東京風景を表現したシリーズ作品。

33) あべ弘士(1948-)《アリュージョン・マジック》 つながる

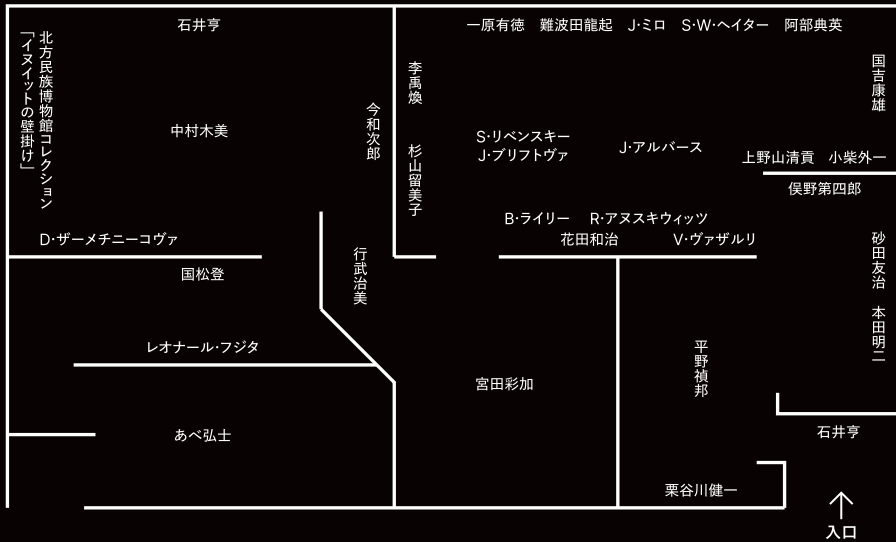
2024年 鉄筆、グアッシュ、鉛筆、パステル・紙 74.5×550.0cm 作家蔵

あべ弘士は、旭川市旭山動物園の飼育係を勤めながら絵本作家としてデビュー。動物園を退職後、1998年から世界各地を旅し、自然環境とそこに生きる動物たちにまなざしを向けた。本展では、2019年に訪れたアリュージョン地方を題材とした絵本『アリュージョン・マジック』(のら書店、2022年)の世界を大きなスケール感で表現する。

(文=河本真夕/北海道立近代美術館学芸員)

北海道立近代美術館 | 会場マップ

※本マップは予定であり、実際の展示とは異なる場合があります。



北海道立北方民族博物館コレクション「イヌイトの壁掛け」

アニー・アクルク・キラブク、エヴァ・ヤーカ、H・マノンク、アイリーン・アヴァーラーキアク・テイクターラク、M・キルラク、マーサ・アプサク、マーサ・ヒクニク、マーサ・コグヱイク、マーサ・ティッキク、マーサ・テイクタク・アナウタリク、メアリー・K・オクヘーナ、メイ・ケナリク、ナンシー・ブギングルナク・アウバウルクトック、オリヴァ・マク・インナカトシク、パウリナ・ウルルクシク・コリト、カルリクサク、R・ヴォスアク+B・ロデ、ヴェラ・アヴァーラ、ヴィクトリア・カクルク
他に作者不詳作品あり

1924-2024 FRAGILE [こわれもの注意]

会場 北海道立近代美術館[展示室B] (札幌市中央区北1条西17丁目)

会期 2024年1月20日(土)~2月25日(日)

開館時間 9:30~17:00 (入場は16:30まで)

休館日 月曜日(月曜日が祝日・振替休日の場合は翌平日休館)

主催: 札幌国際芸術祭実行委員会、札幌市、北海道立近代美術館



北海道立近代美術館
ウェブサイト

札幌国際芸術祭実行委員会事務局

〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目札幌時計台ビル10階 TEL: 011-211-2314 | E-mail: info@siaf.jp

X @SIAF_info | f @siaf2014info | @siaf_info | 札幌国際芸術祭/SIAF | https://2024.siaf.jp



SIAF2024
公式ウェブサイト